

映画「ある精肉店のはなし」

上映会を振り返って

横芝光町を
オモロくする会 上原 広嗣

平成二十八年、横芝光町は合併十周年を迎えた。その記念すべき年を迎えるにあたり、町民が自らイベントを企画・実施する町民提案事業の募集がされた。この公募に採択されると町から三十万円の補助金が交付され、事業の費用に充てることができる。私は、横芝光町に生まれ育ち、大学進学の際にいったん地元を離れたが、二十九歳の時にふるさと横芝光町に戻って来て、法律事務所を開業し弁護士活動をしている。私は、地元に戻って来てから、商工会青年部の活動を通じて、地域活性化・まちづくりのイベントに関わってきた。その活動の一環で、日本のソーセイジの父と呼ばれる大木市蔵氏が横芝光町宮川の出身であることを知った。私たちは、大木市蔵WEB記念館を開設して、大木氏の功績を後世に遺すとともに、大木氏のレシピを再現してその復刻版ソーセイジ開発・製造・販売してきた。その活動をする中で、食肉加工技術についてはかなり勉強したが、牛や豚の解体については注目してこなかった。そのようなとき、大木氏の千葉大木ハム商会のトラックが、東陽村営屠場に停車している古い写真を見つけて、当町には百年以上の歴史を有する東陽食肉センターがあることを思い出した。

食肉センターというと、町民のほとんどの方にとって、なじみのない行政施設であるかと思う。衛生面の問題もあ

り、一般の見学は受け入れていないため、食肉センターの中でどのような仕事が行われているかはあまり知られていない。食肉センターという名称からは見えにくいですが、要するに、牛豚を屠畜する屠場である。生産者が育てた牛豚の生体が食肉センターに運ばれて解体されるのである。その仕事の内容から歴史的には差別にもさらされてきた業種でもある。人によつては、見たくないし知りたくないと思避する方もいるかもしれないが、牛肉・豚肉は私たちの食生活の重要なタンパク源として欠かすことができず、それは、動物のいのちをいただいて私たち人間が生かされていることにほかならない。私たちはスーパーマーケットで肉を買うときカットされた肉を手に取り、それを調理して食べるだけになってしまっているが、それは、動物のいのちをいただいている事実にも無関心であるように思われた。

平成二十七年の夏、商工会の職員が、映画「ある精肉店のはなし」をSNSで紹介していた。気になってホームページを見てみると、すでに映画館でのロードショーは終わっていたが、配給会社からDVDを借りて全国各地で上映会が開催されていた。私たちは、サンプル版を取り寄せて視聴してみた。内容は、ある精肉店家族の生活に密着しながら、その生業である牛の解体の様子が生々しく描写されているドキュメンタリー映画であった。もちろん牛の解体であるから、打額（ノッキング）といって牛の頭を打ち失神させ、吊るして放血させる場面、内臓（モツ）を取りだす場面など、ショッキングな場面もあった。もちろん、こうした映像を見たくない人もいるだろうし、子どもに見せる

のには反対する人もいるだろう。ただ、私たちは、むしろこの映画は子どもにも見てもらいたいし、それは教育上も望ましいことであるとも思われた。

ちようどその頃に町民提案事業の募集があったので、この映画の上映会をやってみようということになった。ただこの規模のイベントは一人ではできないので、任意団体として横芝光町をオモロくする会を立ち上げた。メンバーは、株式会社土屋、株式会社カイホ、フードショップいちほら、新井興産株式会社、コテージ&ペンションなんじゃもんじゃ、ラブズカンパニー株式会社といった横芝光町の地域活性化に熱心に取り組んでいる仲間たちが集まった。

私は、事務局として、企画書の起案や、予算の管理、映画会社とのやりとり、広報などを担当した。企画書は、町役場企画財政課の担当の方にも目を通してもらい、十周年記念事業にふさわしいイベントとなるよう単に映画を上映するだけではなく、本作品の監督である瀨瀬あやさんと町民を交えてのクロストークを企画した。

無事、十周年記念事業に採択された後は、このイベントを多くの町民に知っていたために広報活動を徹底した。メンバーの一人であるラブズカンパニー株式会社に、ポスターとチラシの製作をお願いした。そうして出来上がったポスターを、私は一軒一軒、町内の施設やスーパー、飲食店などを回って掲示のお願いをした。皆さん心よくポスターの掲示を引き受けてくれたし、飛び込みでポスター掲示のお願いをする中で、多くの方が応援の声を掛けてくれた。また、チラシは、読売新聞、朝日新聞、毎日新聞、千葉日報に折り込み、町内の小中学校の全生徒にも配布した。さ

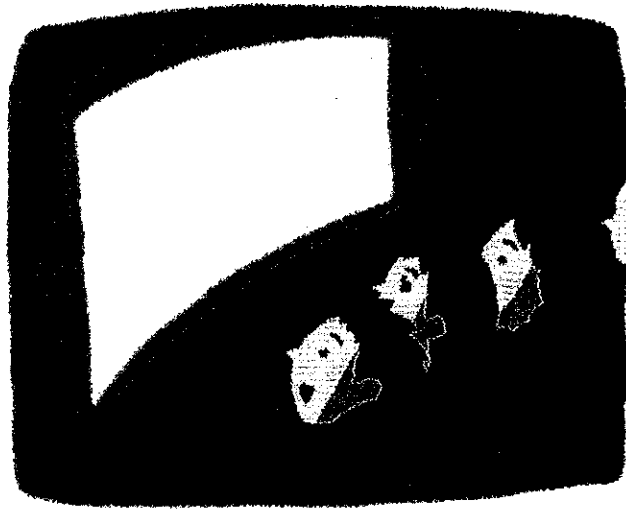
らには、株式会社カイホさんがスクリーン下に掲げる横断幕を作ってくれたし、個人的にもSNSでもイベント告知を繰り返し、できるかぎりのことをしたつもりであった。もつとも、準備が完璧だったわけではなく、プレスリリースや当日のシナリオ作り、予約人数の把握などは至らない点もあった。

迎えた本番当日、整理券を配るほど多くの方が来場してくれて、最終的な来場者数は八十六名になった。佐藤町長より祝辞もいただき十周年記念事業の趣旨が上手く伝わったと思う。映画に対する感想としては、残酷な映像が含まれているとして批判的な意見もあったが、動物のいのちをいただいて私たち人間が生かされているという私たちがこのイベントで伝えたい目的はほとんどの鑑賞者に理解してもらえたと思う。また、クロストークでは瀨瀬監督、生産者の立場として、養豚業者山崎ファームの山崎義貞さん、食肉加工小売業者の立場としてフードショップいちほらの市原昌幸さん、消費者の立場からは町職員の大木敏江さんに出演いただいた。クロストークは活発な意見が交わされ、来場者からの質問も多くなされた。瀨瀬監督は、暮らしとコミュニティをテーマに映画を撮り続けている方で、地域活性化についても示唆に富んだヒントをいただけた。

最後にイベントの総括としては、来場者数が予想を下回り満員にはならなかったことについて、地域活性化イベントが主催者サイドの自己満足なイベントになってしまっていないかという課題を突きつけられた。とはいえ、横芝光町が歴史ある町営の食肉センターを有し、畜産業、食肉加工業が町の基幹産業となっていることを町民のみなさんに

知ってもらえたこと、何よりも動物のいのちをいただいた私たちが人間が生かされているという事実をあらためて認識していただけたことを考慮すると、今回の映画上映会はま
ずまず成功したイベントであった。

(橋場在住)



申歳自記

椎名文彦

赤いパンツ

その日は、妙にうきうきしていました。行き交う人は誰も気付いていないので、あの芸人の台詞を言ってみたくありませんでした。

前日の夜、娘がにやにやしなながら、私と女房に袋を手渡しました。「申の日がいいんだって、開けてみてよ」。で中から何と赤いパンツが出てきました。還暦以来のことです。もつとも、あの時は禪だった気がするが、はくことに決めました。

その申年の肌着の袋には、「申年に赤い肌着を身に着けると縁起がいい。申の日に縁起を担いで贈るといい。」と書かれています。そんな謂れがあることを初めて知りました。娘は、私共の暮らしぶりを見て、気をつかってくれたのでしよう。ありがたいことでした。悪乗りで、あの芸人の「安心してください。はいてますよ」のかっこうで写真を撮られ、孫たちからは、あきれられてしまいました。ちよつぱり、はしゃいでいられる幸せを感じる二人でした。連合いになって四十二年が過ぎていきます。たまにはこんなこともいいかな。

トタン屋根

名古屋に出かけていた私に、女房から電話がありました。いつも来るペンキ職人が訪ねて来たようです。きつと、「そろそろどうですかね」と言っていたのでしょうか。もう